

## ベトナム中部山岳農村におけるモノカルチャー化と地域レジリエンスに関する研究

時任 美乃理

本稿は、東南アジア各地で積極的に行われてきた農村開発の中でも産業造林の開発に焦点をあてた研究の成果を纏めたものである。産業造林の導入が地域社会や人々の生活環境に与えた影響を明らかにするためには、地域に導入された産業造林の実態と、従来の生活維持システムの両者を包括的に評価する必要がある。そこで本研究では、ベトナム中部山岳農村を事例として取りあげ、現地に導入されたアカシア林業の実態と、人々の生活を支えている副次的生業の実態を明らかにすること、そしてその上で、持続的な形で農村が発展していくために必要な課題解決の視点を導出することを目的として研究を行った。

第1部では、対象地域の景観を俯瞰するための土地利用分析と、対象地域で営まれている生活実態を明らかにするための生業構造分析をそれぞれ行い、地域住民がどのような形でアカシア林業に携わり、どのような脆弱性をかかえているのか、地域課題を考察した。まず、土地利用図の分析からは、居住地や畑作・水稲耕作の農業用地が山間部の河川沿いに分布し、それらを取り囲むようにして斜面でアカシア造林地が分布している状況が把握された。一見すると画一化された土地利用がなされているように見えるが、土地利用の多様度を分析すると、山間部の居住地周辺に小規模な土地利用が密集しており、アカシア造林業だけでなく水稲耕作や畑作、淡水魚の養殖業等が営まれている現状が明らかとなった。さらに、そこに住む人々の生活環境等を把握するために実施した集落全 151 家世帯への聞き取り調査を通じ、土地利用図で確認された主生業（アカシア林業、ゴム林業、水稲耕作、畑作）の世帯別の従事状況と、主生業を補うホームガーデンにおける作物栽培、家畜運用、林産物採集の有無や、アカシアの伐採運搬労働への従事状況など、マクロデータには表れない世帯情報が抽出された。それらを用いて統計分析を行った結果、次のような地域課題が明らかになった。

対象集落では、水田や畑作用地、養殖池などの多様な土地利用が確認されたが、世帯別でみると、所有している土地の多くをアカシア林業にあてている世帯が多数存在すること、また、徐々にアカシア林に転換している状況が確認でき、生業のモノカルチャー化が進行していることが明らかになった。バランスよく様々な生業を営む世帯が一部みられたものの、水稲耕作や畑作、魚養殖に使用できる平場は限られており、その数は限定的である。さらに、土地利用から生業を捉えた視点では判別できないが、自身の土地を持たないためアカシア材の伐採や運搬作業に携わる日雇い労働の収入に依存している世帯もあることが悉皆調査を通じて明らかにすることができた。アカシア林業の導入が進むことで、付随する雇用が発生し、土地利用からみた数値上の統計だけではわからない、単一生業に極端に依存する脆弱な構造があり、かつ進行形にあることがわかった。一方、土地利用図からみた土地利

用だけに着目した場合、アカシア林業だけを営んでいる世帯は「モノカルチャー型生業構造の世帯」として捉えられるが、ホームガーデンのような小規模な土地利用は土地利用図には反映されておらず、これを考慮すると、ホームガーデンにおいて自家消費作物を中心に栽培し、食糧を確保している世帯も存在することが明らかになった。

一般にベトナム中部山岳地域ではアカシア林業のプランテーションが支配的で、モノカルチャー化が進行しているといわれているが、実際に、そうした地域を精査してみると、そこには様々なアカシア林業への依存形態が存在し、また、目には見えない形でアカシア林業への依存度が高まっていくことがわかった。アカシア林業へのモノカルチャー化が発生している地域では統計情報には表れないリスクの不顕性があることに留意しなければならない。こうした状況をより明確に理解するため、実際にアカシア林業や副次的な生業がどのように営まれているのか、本研究ではそれぞれについてさらに詳細を精査した。

第2部では、アカシア林業の実態に焦点をあてた。対象地では、生産林の拡大と貧困削減を目的として、生産林用の林業地の土地利用権を分配するプロジェクトをはじめ、技術講習会や苗木購入補助等の支援が実施されていた。しかしながら調査では、そうした支援を受けたにも関わらず造林を開始していない、もしくは辞めてしまったと証言する世帯がみられ、貧困対策として実施されている林業支援が、住民の生活環境改善に効率的に寄与していない可能性が示唆された。そこで林業地の利用権をもちながら得たにも関わらず林業を営むことが困難な状況に陥る要因を探るため、対象地においてどのように、かつどのような場所で林業が営まれているのか、その管理や運用方法と各林業地の特徴を調査し、各世帯が営む林業の特徴を精査した。

従来の研究は、アカシア林業に特化した世帯が増加している状況や、それにとまなう社会・経済状況の変化を、面積基準で評価してきた。たとえ林業地一筆の面積が同じ場合も、その立地条件により実際の植生状態や林地の運用状況は異なるが、世帯ごとの経済状況調査では、そうした林業地ごとの違いは考慮されていなかった。対象地では、林業地の基本的な運用が各世帯の裁量に任されている一方、伐採や運搬は買い取り仲介業者によって行われ、林道からの距離や林業地の傾斜など造林地の立地条件に基づく材搬出難度が人力搬出にかかるコストを規定している。そのため、このコストは仲介業者の買い取り価格に反映され、林業地の立地条件によって住民が得られる収入に差異が生じていることがわかった。

この作業効率の高低、すなわち材搬出難度を、GISを用いた空間分析によって評価し、個々の林業地がもつ経済的格差を視覚的に示した。行政機関から収集した支援世帯のデータを合わせて分析した結果、支援を受けている林業地には材搬出難度が高いと評価できる林業地が含まれていることが明らかになった。現在実施されているアカシア林業支援では、対象とする世帯を選ぶ過程において林業地ごとの地理的条件に起因する材搬出難度の違いは考慮されておらず、すべての林業地は同等に扱われていた。そのため、支援によって林業地の利用権を得たにも関わらず、林業地の立地条件のために人力搬出にかかるコストがかかり、十分な収入が得られないケースが発生している実情を明らかにした。

第3部では、人々の生活を支えてきた副次的生業として、森林資源利用、ホームガーデン利用、そして家畜運用に焦点を当てた。森林資源利用に関する研究では、モノカルチャー化の脆弱性要因の一つである病虫害に着目した分析を行い、森林資源利用が持つ生業を支える機能について論じた。この研究では、住民による日常的な薪用木材の採集行動が、頻繁な枯死木の焼却処分につながり、結果的に樹木萎凋病被害の拡大を抑制している可能性を示した。対象集落に住む少数民族は、近年の定住定耕化政策の実施以前から、長い年月にわたり森林資源を利用してきた。その間の自然との合理的応答を通じて、枯死木の積極的な薪材利用など、資源採集における自然との調和を獲得してきた。「利用価値の低い木質資源を薪として利用する習慣」は、現在も残る住民の旧来の生活スタイル、言い換えれば「遺存的習慣」であり、林地を健全に維持するための社会的機能だと捉えることができる。しかしながら、貨幣経済の浸透により将来的には、林業を営む住民による薪利用が継続されない可能性があることも明らかとなった。以上のことから、地域住民の長きに渡って得られた現存する生活スタイルを改めて評価し、彼らの行動自体が持つ潜在的機能を損なわないような形で発展に導く必要性がある。

家畜運用に関する研究では、特に対象地で実施されてきた政府および非営利組織による家畜導入支援プロジェクトに着目し、アカシア林業の導入下において家畜運用という副次的生業がどのように営まれているのか、その現状と課題について考察した。家畜導入支援は、アフリカや東南アジア大陸部を中心に事例報告が多くみられ、その機能や効果は比較的認知度が高く肯定的に捉えられることが多い。そのためベトナムにおいても家畜導入支援は積極的に実施されており、国内メディア等の評価も肯定的である。しかし、支援の規模や投資額が公表されている一方で、家畜を受給した地域の実態や、支援後の継続的な報告はほとんどなく、特に早成樹プランテーションなどの新しい産業が導入され、生活環境が著しく変化している状況にある農村において、家畜運用が上手に適合するのかどうかは未だ検証されていない現状にあった。本稿では家畜導入支援のうち、肉用牛を導入する支援の一例を取り上げ、その支援の実施過程を検証した。その結果、家畜を導入することで世帯の生業を多様化し、収入源を増加させることが支援の目的であるにもかかわらず、人手不足や、家畜運用にかかる経費が家計を圧迫してしまう等の問題が明らかになった。

本稿を通じ、各世帯のアカシア林業への経済的依存度や生活の不安定性を、マクロな統計情報や面的な土地利用情報だけで判断することは不十分だということ、そして各世帯が生活破綻に陥るリスクの度合いをより実情に即した形で評価するには、現金収入にはならないような小規模な土地利用や生活習慣も含めた上で、各世帯がいかに生業破綻のリスクを軽減・回避しているのか、すなわち、各世帯が“どれだけレジリエントな生活をしているのか”を考慮する必要があるということを示した。そして、地域内に潜在する資源利用の習慣が、様々な生業破綻のリスクを軽減する機能を持ち、人々の生活環境を支える役割を果たしている、すなわち「住民が潜在的に保持しているレジリエンス」となっていることを指摘した。また一方で、それらが衰退傾向にあることも明らかにした。

本稿では、アカシア林業が地域の一大産業として定着し、モノカルチャー化が進行している当該地域が着実に発展していくためには、今ある地域レジリエンスを再確認し、適切なリスク評価に基づいた政策・支援を実施すべきであると結論づけた。そのためには、林業や農業といった主生業のみならず、日雇い労働や森林資源利用、ホームガーデン利用といった統計には表れない生業構造、およびそれぞれの生業同士の相互作用を明らかにすることが必要不可欠である。目まぐるしい社会変化にさらされている東南アジアの農村に今必要なのは、地域に潜在する力に改めて向き合い、地域に最も適した政策や支援のあり方を模索していくことだといえるだろう。